

初恋の味

静岡県

飯田 みゆき

真上から照りつける八月の太陽は、じりじりと汗に濡れた背中を焦がす。遠州灘に面して広がる飛行場に木陰は殆どなく、背丈程も伸びた夏草が一面に生い茂っていた。

昭和十九年、当時女学校二年生の私は夏休みも無く、その日も級友達とこの飛行場へ勤労奉仕に来ていた。伸びた夏草は毎日刈っても一向に減らず、私達を悩ませ続けたがそれでも私達は汗と埃とむせかえる様な草いきれの中で、少しでも多くの面積を片付けようと必死になって働いていた。

そして待ちに待った昼休みが来ると、皆は先を争って僅かな木陰に殺到する。

しかしその日当番で後片付けに手間取った私と仲好しの友にもう木陰は無く、私達は日陰を求めて離れた兵舎の裏側へ廻った。

火照った身体は水ばかりを求め、食欲は殆ど無い。口を利く事さえ億劫な二人は兵舎の板壁に寄りかかり、雲一つ無い青空をぼんやりと見上げていた。

と、その時、誰も居ないと思っていた兵舎の窓が開き、頭の上から声が降って来た。

「君達、暑いのに毎日ご苦労様。」

びっくりして見上げると真赤に日焼けした若い男の人達が、にこ／＼し乍ら私達を見下ろしている。その中窓から次々と顔が覗き、

「君達、可愛いね、何年生？」

「どこの学校から来たの？」

などと矢つぎ早やに声が降って来る。男女間の規律の厳しかった当時、若い男性と言葉を交す機会など無かった私は、ただもうどきまぎして容易に返事も出来ないでいた。そのくせ妙に嬉しい様な恥しい気分で顔が火照り、胸がどき／＼波打つのを感じていた。

彼等はそんな私に、自分達は学生あがりの下士官で訓練の合間には読書や勉強もしている事、君達同様お国の為に学業を擲^{なげ}って頑張っている事。家には私達と同年配の妹がいるなど、一方的に口々にお喋りをしたあげく、

「そうだ、いいものをあげよう」

と一人が言うと、やがて白い液体がなみなみと注がれたコップが私達に差し出された。

「さあ、飲んでごらん、おいしいから」

「でもー、みんなに悪いから……」

私達が出しかねてもじ／＼していると、

「大丈夫、分かるもんか、早く飲みなよ」

口々にせき立てる。困惑している私達を微笑み乍ら眺めている人もいた。意を決した私達はコップを受け取り、こわく／＼口に運んだが一口飲んだ途端、思わず

「おいしい!!」

と叫んでしまった。

なぜなら私はそれ迄こんなおいしい飲み物を口にした事が無かった。質素な生活の中で私達が口にする飲み物といえば、せいぜいラムネかミカン水ぐらいな物で、それも祭りか物日に限られていた。

「おいしいだろ。それは初恋の味なんだ」

妹が居ると話してくれた下士官が教えてくれた。恋だの愛だの口にしない時代だったから私達は赤くなって慌てて飲み干したが、そんな私達を沢山の目が優しく見守っていた。

いつ迄もこの刻が続いて欲しいと思う私の願いも空しく昼休みは終わり、私達は心を残し乍ら其処を離れなければならなかった。

「もう行っちゃうのかい」

「また明日も此処においでよ」

深々と頭を下げる私達を名残惜しげに見送ってくれた人達を想い乍ら、再び炎天下での作業が始まった。

幸い級友達にも気付かれず、友と二人だけで味わった夢の様な一刻^{ひととき}。そして「初恋の味」という甘酸っぱい飲み物の味は、私にまるで禁断の木の実を口にした様な恐れと不安を抱かせる一方、胸の奥から湧き上がる恍惚にも似た感情が身体中にたゆたい、私は午後

の作業を夢見心地で終えたのであった。
やがて戦局は日一日と激しさを増し、学徒動員で工場へ通う事になった私には、再び飛行場での作業の機会は来なかったのである。

空襲や艦砲射撃に逃げ惑い乍らも生き延びた私が、あの懐かしい味が「カルピス」と知ったのは戦後ずつと経過してからだだった。

白い液体を口を含むと鮮明に甦えるあの日。

たま／＼居合せた私達にとっておきのカルピスを振舞い、「初恋の味」と教えてくれた兄の様な人達。束の間の昼休みに出合った私達に、せかさされる様に口々に出身地や家族の事、大学の事など話してくれた優しい彼等が、その後何処でどうなったか知る術^{すべ}の無いのが本当に悲しかった。

学業を擲つてと彼らは言った。もつと勉強したかったに違いない。戦後隠された事実が明るみになると共に、私も優秀な彼等は恐らく大空に散華しただろうと思うしか無かった。多感な少女時代、一杯の飲み物を通して、名も知らぬ人に抱いた想いはまさしく私の初恋であり、傘寿を過ぎた老婆となっても儚く懐しい思い出として生き続けている。